

## 「劇的に機能させるパーシャルデンチャーの対応と着目点」

奥森健史

審美・インプラント時代も一時代を築き、その日常臨床において上下顎欠損歯列への対応で、パーシャルデンチャーが選択された場合、患者可撤性装置という“限られた条件下”で、どれだけのポテンシャルを発揮できるのかが常日頃、筆者が頭を悩ませる部分である。

進化したと紹介される各マテリアルに対し、私たちテクニシャンはそのリスクとベネフィットを見極める知識も必要となる。口腔内に装着された時点からの経年変化を想定しながら対応することはとても重要となる。例えるならば、上下顎がしっかり嵌合している少数歯欠損の場合なら、比較的ファイナル補綴装置のイメージが想像するに難しくないが、多数歯欠損で“前歯部のみ接触やすれ違い咬合”など、ましてやそれが前歯部にまで及ぶ連続欠損などの場合、“何から手を付ければよいのかイメージがわからない”というラボサイドの意見もよく耳にする。特に咬合支持を失った上下顎の欠損歯列ともなれば果たしてデザインされた補綴装置でクリアできるのか。ラボサイドとしてまず、欠損補綴の目的としての歯列弓の保全、審美性の改善、機能回復、残存組織の保全というキーワードを考慮し構造をデザインするが、それに対し各マテリアルを組み合わせ立体化していくという“マテリアルセレクション”も重要な部分である。口腔内にトライシ両側歯列にまたがる比較的大きな補綴装置を高いクオリティに構築していくにはチェアサイドとの綿密なディスカッションとそれに準じたステップが必要となる。本講演では、ラボワークからの視点で、一つのケースをステップごとに着目点を紹介したい。前述したように大きな補綴装置となるパーシャルデンチャーは金属・高分子材料、支台装置(サベイドクラウン)も含め異なる材料が混在し立体化させる装置である。総合的なラボサイドの判断が必要であると考える。